

あづみの

2025.10
ANNIVERSARY

20th

広報あづみの 安曇野市制施行 20 周年記念号



暮らしが息づく 安曇野の 未来に向かって



安曇野市長

太田 寛

安曇野市は本年、市制施行20周年を迎えました。この記念すべき節目を多くの市民の皆さまと共に迎えることができましたことに深い喜びを感じております。

誕生から20年の年月が経ち、旧5町村の意思を受け継ぎつつ、市民の皆さまの暮らしと共に作り上げてきた魅力と誇りの大きな流れは安曇野の大地を潤す水のように広がりを見せています。その流れは全国にも広がり、そして再び安曇野での暮らしにつながるよう、安曇野市では「自然、文化、産業が織りなす 共生の街 安曇野」を目指して施策を展開してまいりました。

北アルプスや田園風景と共に、そこに暮らす人々の営みを感じられる――。安曇野の魅力は自然と暮らしが一体となって作られております。先人から受け継いだ自然

と共にある伝統・文化を未来へつないでいくために「ふるさととは未来からの預かりもの」という思いを持ち、私たちは次の世代に安曇野での暮らしをしっかりと引き継いでいく必要があります。

第二次世界大戦が終結するまでの約15年間、多くの若者が安曇野から戦場へ赴き、貴重な生命が失われました。彼らが故郷を離れる時に目に焼き付け、異郷で思い浮かべたであろう美しい山々と清らかな水の流れをいつまでも残していくのが私たちの使命です。子や親や兄弟姉妹を失う悲しみを後世の人々に味わせてはなりません。

この市制施行20年、そして戦後80年を新たな出発点として、未来への一歩を共に踏み出しましょう。安曇野が、これからも人々の心を潤し、希望を育む場所であり続けることを心から願っております。



水の音、山の記憶

歴史と共に語り継がれてきた暮らし



「松本を出て、道を左に折れ、養老坂を下り、平瀬村の茶店に憩ひ、熊倉の橋を渉り、成相新田より穂高村に至る」と1849年につくられた「善光寺道名所図会」に描かれています。かつて犀川（豊科高家熊倉地区）には千国街道最長の熊倉橋が架けられ、交通の要所を担っていました。また、「信府統記」（1724年）によると、安曇野を拓いたと言われている伝説・犀龍小太郎が母の犀龍と出会ったのがこの熊倉付近と伝えられています。

また、安曇野のシンボルの一つ常念岳。常念岳はかつて乗鞍山（岳）と呼ばれていました。昔、毎年暮れになると常念坊という山姥が大きな徳利を持って酒屋に酒を買いに来たからという説や、八面大王を退治するため坂上田村麻呂が安曇野に遠征した際に、大王の重臣である常念坊がこの山へ逃げ込んだからなどの由来があります。

これらのように安曇野には先人から受け継いだ伝統や言い伝えが多く存在します。そして、今も私たちの心の中に存在し、暮らしと深く関わりながら安曇野の風景と生活を作り続けています。

10		6		3	1
12	11	7		4	2
13		9	8	5	

①北アルプスとひがしやまに囲まれた安曇野 犀龍小太郎伝説に思いをはせながら ②でいらばつちやが座った跡とされる金玉池 ③白蛇伝説が残る龍門淵の夜桜ライトアップ ④八面大王と坂上田村麻呂の合戦から名付けられた合戦尾根を登ると出会う北アルプスの女王・燕岳 ⑤変わらぬ清流をたたえる蓼川 ⑥せせらぎの小径 ⑦岩原神社のお舟祭り ⑧穂高見命の姉・大分の豊玉姫からの贈り物とされる安曇野神竹灯 ⑨でいらばつちや伝説が残る三郷小倉のリンゴ ⑩常念岳から蝶ヶ岳への稜線 常念坊を探して ⑪ウオータースポーツが盛んな前川 ⑫かつて八面大王の御宝田だったと言われる場所が開かれている安曇野花火 ⑬熊倉橋と熊倉の渡し跡

2005

平成17年10月 安曇野市発足
初代市長に平林伊三郎氏が就任
平成18年2月 11月 安曇野市議会がスタート
合併記念式典を開催
平成19年4月 市夜間急病センター開所
ふるさと寄附開始
平成20年7月 穂高交流学習センター「みらい」開館
平成21年9月 第2代市長に宮澤宗弘氏が就任
平成22年6月 第1回安曇野市民スポーツ祭を開催
豊科交流学習センター「きぼう」開館
平成23年2月 4月 ZETV連続テレビ小説「おひさま」放映開始
豊科ICが安曇野ICに名称変更
平成24年10月 安曇野市平和都市宣言を制定
上松美香さんがふるさと観光大使に就任
平成25年4月 9月 明科支所・公民館利用開始
宮澤宗弘氏が市長再選
平成26年4月 11月 第1回信州安曇野新そばと食の感謝祭開催
(株)中村屋がふるさと観光大使に就任
平成27年5月 12月 防災広場がしゅん工
市役所本庁舎での業務開始
第1回信州安曇野ハーフマラソンを開催
市制施行10周年記念式典を開催・市歌初披露
平成28年4月 市水道事業第1次拡張が完了・水源がすべて地下水に
穂高支所を新築
安曇野しゃくなげの湯オープン
拾ヶ堰が世界かんがい施設遺産に登録
「安曇平のお船祭り」が国選択無形民俗文化財へ
地域見守り活動に関する連携協定を開始

令和3年1月 新型コロナウイルスがまん延イベント等が相次いで延期・中止に
2月 新型コロナウイルス接種対策室を新設
3月 穂高クリーンセンター新ごみ処理施設が稼働
4月 東京2020オリンピック聖火リレーが安曇野に
新型コロナウイルスワクチン集団接種を開始
5月 安曇野市版マンホールカードを発行
6月 あづみ野産業団地拡張事業造成工事がしゅん工
7月 第7回信州安曇野ハーフマラソン代替イベント「安曇野ランランFUN FUN RUN」を開催
8月 定時定路線バスのバス停新設と増便
9月 あづみの名水クリアボトルを限定販売
10月 記録的大雨により警戒レベル5「緊急安全確保」を発令
11月 穂高プール33年の歴史に幕
山岳クラウドファンディング実施（燕岳テント場公衆トイレの改築費用）
ANCアリーナが完成
篠原信一さんがスポーツ大使に就任
第3代市長に太田寛市長が就任
延期していた成人式を開催

2021

2020

安曇野市誕生、市制施行15周年



安曇野市誕生カウントダウンイベント



本庁舎で業務開始



国選択無形民俗文化財に選択された安曇平のお船祭り



信州安曇野田んぼアートを公開



東京2020オリンピック聖火リレーが安曇野に



篠原信一さんがスポーツ大使に就任



新型コロナウイルスワクチン接種を開始



8月の大雨により林道が崩落



延期していた成人式を開催



限定販売したあづみの名水クリアボトル

新型コロナウイルス流行 新たな生活様式を見据える

2020年から続いていた新型コロナウイルスの影響で市内でもイベントの中止や延期が相次ぎました。ワクチン接種を進め、コロナ禍での新たな生活様式による取り組みやイベントを開催しました。10月には第3代市長として当選した太田寛市長が初登庁しました。

3月	安曇野市空き家バンク開設 自治基本条例が施行
4月	防災ラジオ運用開始
8月	宮澤宗弘氏が市長3選
10月	三郷交流学習センター「ゆりのき」開館 有森裕子さんがスポーツ大使に就任 市文書館が開館
6月	信州花フェスタ2016開催
10月	信州安曇野田んぼアートを公開
平成31年4月	国土交通省の「水資源功績者表彰」を受賞
令和元年6月	市内全域の水道料金を統一
8月	豊科南小学校の環境美化活動が環境大臣賞を受賞
2月	新型コロナウイルス感染症対策本部を設置 池田町と災害時等相互応援協定を締結（松川村とは7月に締結）
10月	市制施行15周年記念式典開催

令和4年1月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

12月

令和5年1月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

10月

11月

2022

ANCアリーナオープン

あつみのミュージアムカードの配布開始

ANCアリーナ・JR穂高駅前に給水スポットを設置

松本糸魚川連絡道路 市内新設区間「安曇野道路」が事業化

組織を改編 子どもに関する業務を教育部に一元化、移住定住推進課を新設

福祉医療費給付金の対象年齢を18歳まで拡大 市マウンテンバイクコースがオープン

多様性を尊重し合う共生社会づくり条例を施行

あつみの水結登録制度スタート

日展 安曇野展が開催

穂高神社式年遷宮祭 あつみ野てらすを開催

豊科南部総合公園の噴水がリニューアル 子育て世帯生活支援特別給付金を支給

ウクライナ在日大使が市を訪問

アーティスト・イン・レジデンスを初開催

JR新宿駅で「あずさマルシェ」を初開催

平和都市宣言制定10周年イベント 被爆ピアノ平和祈念コンサートを開催

新生児スクリーニング検査費用の助成開始

デマンド交通あつみんアプリ予約が可能に

各種証明書交付手数料のキャッシュレス決済を開始

「広報あつみの」のデザインをリニューアル

安曇野ゼロカーボンシティを宣言

多様性を尊重し合う共生社会づくり計画がスタート

松糸道路の接続道路として明科地域の市道を事業化

新型コロナウイルス感染症が5類に移行

安曇野スポーツフェスティバルを初開催

内水氾濫に備え排水ポンプ車を配備

クラムザッハとの姉妹都市提携30周年記念式典を開催

外国籍市民相談窓口を開設

結婚新生活支援事業スタート

シンガポールで安曇野の特産品をトップセールス

燕岳テント場トイレ使用開始

市内2カ所目となるラウンドアバウトが完成

ニホンザル追い払い隊が始動

8年ぶりに信州安曇野薪能が明科で開催

安曇野フルコース和食・フレンチ・中華・イタリアン 4編が完成

安曇野ぐらしの魅力を発信 SITE（東京駅前）でイベント初開催

明科駅前広場が完成

ANCアリーナ
(新総合体育館)がオープン



ANC アリーナがオープン



穂高神社式年遷宮祭・あつみ野てらすを開催



市マウンテンバイクコースがオープン



あずさマルシェを JR新宿駅で初開催



8年ぶりに明科で屋外開催した信州安曇野薪能



クラムザッハとの姉妹都市交流30周年を祝う



燕岳テント場トイレが完成・使用開始



安曇野フルコースが完成

新たなスポーツの拠点として1月にANCアリーナが、4月に市マウンテンバイクコースがオープン。また、東京藝術大学出身のアーティストが安曇野に滞在し、作品制作を行う「アーティスト・イン・レジデンス」を初開催。市民の皆さんが文化・芸術を身近に感じられるようワークショップなども行いました。



ミュージアムカード



被爆ピアノ平和祈念コンサート

多様性を尊重し合う
共生社会づくり計画を策定

年齢や性別、国籍、障がいの有無に関わらず全ての人が認め合う安曇野市を目指し、4月に多様性を尊重し合う共生社会づくり計画を策定。外国籍市民相談窓口を設置するなど、共生の街への一歩を踏み出しました。

2024

令和6年1月

VC長野トライデンツとホームタウンパートナー協定を締結

2月

県内自治体初の観光メタバース空間が完成

3月

北穂高地区の産業用地整備に向け官民連携協定を締結

東部アウトドア拠点整備基本構想を策定

全公立認定こども園・幼稚園の園庭芝生化に着手

長峰山ハンググライダーランチャー台・ZCアリーナスケートボードひろばをリニューアル

4月

SDGs 未来都市&自治体SDGsモデル事業に県内初のW選定

5月

小説『安曇野』復刊に向けたクラウドファンディングを開始
安曇野生まれの夏秋イチゴ「あまあづみ」が誕生

7月

安曇野流リモートワーク事業スタート

8月

あづみ野ランド浴場がリニューアルオープン
安曇野犀川×前川かわまちづくり計画が国に登録

9月

北アルプス登山道混雑緩和のため駐車場の可視化システムを導入

10月

江戸川区と友好都市盟約50周年を記念し穂高荘・燕岳登山ツアーを開催
安曇野 Outdoor Meeting を初開催

11月

中学生キャリアフェスティバルを初開催
国スポ・全障スポの市実行委員会設立
発起人会が始動

令和7年1月

証明書コンビニ交付サービスの料金を改定
窓口より100円安く取得できるように

2月

新たな産業団地開発に向けエントリー企業の募集を開始

3月

さとぶろ。機構が設立
本陣等々力家の再生・活用に向け民間提案協定を締結

4月

8人の高校生をクラムザッハへ派遣
小説『安曇野』が復刊 お披露目を開催

5月

市マウンテンバイクコースが第39回全日本自転車競技選手権大会の開催地に決定
福祉医療給付金18歳までの窓口負担を無料化

6月

プラスチック製品廃棄物の資源回収開始
第1次教育振興基本計画を策定

7月

こども計画を策定
安曇野ナンバー交付開始

8月

穂高鐘の鳴る丘集会所がリニューアルオープン
IRE WORLD RATING CHAMPIONSHIP

9月

2025日本代表選考レースが前川で開催
高齢者補聴器購入費用補助を開始
三股登山口へのバスの実証運行を開始

10月

戦後80年平和事業を開催
国スポ・全障スポ市実行委員会設立総会
第1回通常総会を開催
オープンファクトリーを初開催
安曇野市美術館がリニューアルオープン
市制施行20周年記念式典を市民活動フェスタと同時開催

2025

SDGs 未来都市・モデル事業にダブル選定



VC長野トライデンツとホームタウンパートナー協定を締結



全園の園庭芝生化に着手



SDGs 未来都市・モデル事業にW選定



江戸川区との友好都市盟約50周年記念穂高荘・燕岳登山ツアーを開催



安曇野生まれの夏秋イチゴ「あまあづみ」



中学生キャリアフェスティバルを開催



クラムザッハへ高校生8人を派遣



穂高鐘の鳴る丘集会所の大規模改修工事がしゅん工



安曇野市美術館がリニューアル



小説『安曇野』が復刊



安曇野ナンバー交付開始



戦後80年平和事業を開催

安曇野ナンバー交付開始 市制施行20周年記念事業を実施

5月には安曇野ナンバーの交付が始まり、「安曇野」を付けた車が全国を走り始めました。市制施行20周年を記念して、市民提案事業や記念式典を実施。また、戦後80年平和事業を開催し平和を考え、未来へ平和をつなぐイベントや取り組みを行いました。

国連が掲げたSDGs達成に向けて地域の特色や強みを生かし積極的に取り組む自治体として5月に内閣府から「SDGs未来都市」として選定を受けました。また、さとぶろ。を中心として取り組むプロジェクトが「SDGsモデル事業」として同時に選定されました。

大森 教雄さん（43・豊科） 子どもの数だけ増える 地域との関わり

■家族構成

父・大森教雄さん(43)
母・亜希子さん(45)
長男・資介さん(19)
次男・柊芽さん(16)
長女・あかりさん(13)
三男・陽目さん(11)
四男・創竣さん(9)
五男・康永さん(6)
次女・やよいちゃん(3)
六男・新文くん(1)



好きなことを全力で楽しむ

子どもの頃から好きなことをやらせてもらえる環境で育ち、医師、ジャズミュージシャン、青年海外協力隊と私を含め兄弟それぞれやりたいことを仕事にしています。この経験から「子どもは自分の倍の6人欲しい」と結婚式で宣言。本年、結婚20周年を迎えますが、目標を超える8人の子どもに恵まれています。

「過度な期待をせずに本人がやる気を出すタイミングを待つ」。これが私の子育て論です。わが家ではまず、全力で遊びやスポーツ、趣味を楽しみます。趣味が多いと将来、人間関係を築きやすくなりますしね。

安曇野は子どもがスポーツに触れる環境が充実していて、スポーツ少年団にみんな通っています。それに合わせて私がサックスをやっていることも

■プロフィール

愛知県出身。2018年県立こども病院赴任を機に移住。妻と8人の子ともたちと暮らす。庭でニワトリを飼育し、家庭菜園なども行いながら自然と触れ合う子育てをしている。

安曇野の暮らしに溶け込む

子育てをしながら勤務医として働くことは一見大変そうに思えるかもしれませんが。しかし、当直明けの日中も活動できますし、職場や地域の皆さんが協力してくれるので毎日充実しています。妻も「子育てがたたくさんできて幸せだし、上の子と下の子との関わりを楽しめる」と笑います。

地域と関わる機会は子どもの数だけ増えます。4年前、公募制となった中学校のPTA会長になりました。最初は不安でしたが、活動をしているうちに地域との関わりが面白くなり、どんどん夢中になっていきました。今は、このような機会を増やし、安曇野に昔から住んでいたように暮らすことをモットーにしています。それを迎え入れてくれる環境があるこの安曇野で、今後も家族と地域に寄り添い生活していきます。

それぞれの思いは
未来を紡ぐ
私たちの安曇野物語



安曇野市が誕生して20年。
私たちは、北アルプスの麓に広がる自然と先人たちが築き上げてきた文化・歴史を受け継ぎ、その環境と共に人と地域のつながりの温かさに包まれて、日々の暮らしを営んでいます。

「自然、文化、産業が織りなす
共生の街 安曇野」へ――。

未来に向かうための歩みは、決して特別なものではなく、今を精いっぱい生きる一人一人の思いの積み重ねの先にあります。

この章では、市民の皆さんが暮らしと共に感じている幸せや、行っている活動、その中で大切にしている思いを届けます。

節目の年に「私たちの暮らしと安曇野」をあらためて見つめる。そして、それぞれの思いが一つとなり、今残したい安曇野物語が未来へとつながっていきます。

子どもたちを信じて 「待つ」ことの大切さ

内川 舜也さん（35・三郷明盛）



自分を見つめ直し、子どもたちを信じて見守り続ける内川さんに、教師として大切にしていることを聞きました。

楽しさから始まる 体づくり

昨年度まで、市の体力向上推進委員として、脳や心、体に刺激を与えて力を引き出す「コーディネーショントレーニング」の普及活動をしてきました。これは、「できるようにすること」よりも、「体を動かすって楽しい」と感じてもらうことを大切にしました運動です。委員を退いた今でも、体を動かすことを遠ざけず、「やってみよう」と思える気持ちの芽を育てられたらと思います。子どもたちと関わっています。将来、安曇野ハーフマラソンに出たり、AFCアリーナでスポーツ観戦をするような子が出てきたらうれしいです。

原点を見つめ直した1年

教師になって13年がたちましたが、10年目を終えた頃、「子どもたちが内に秘めた大切な思いを、集団生活のために犠牲にしているか」と疑問を感じました。そのタイミングで現場を離れ、信濃教育会研究所で1年間、自身と深く向き合う時間を持ちました。その中で気づいたのは、「待つこと」の大切さ。

以前は、教師は子どもたちを引っばっていく存在だと思っていましたが、今では子どもを信じて見守ることを大事にしています。もちろん必要な時は指導しますが、すぐに介入せず、言動の裏にある思いや願いに目を向けるようになりました。問いかけ方も以前とは変わってきていると実感しています。何が起きるか予測が難しいこれからの時代では、変化に対応する力が大切です。その方法は教科書には書かれていません。だからこそ、正解を出すことよりも、失敗や「わからない」と感じる経験を大切にしたいと思っています。安曇野には自然が多く、地域とのつながりも深いので、学校の外でもいろいろな体験ができます。それらを通して、失敗ややり直しを繰り返しながら学び続けることで、生きる力を育ててほしいです。私自身も、この正解のない教育の世界で、教師として学びを楽しみ続けたいと思っています。そして、その楽しさが子どもたちにも伝わっていくように、これからも一緒に過ごしていきます。

■プロフィール

豊科北小学校勤務。

昨年度、市体力向上推進委員会の委員長を務める。

三郷の早起き野球でも活躍中。

柳ちゃんの成長を家族で見守る山崎さん。毎日の暮らしや子育てで感じていることを聞きました。

娘と歩む 家族の日々

田んぼから響いてくるカエルの大合唱を聞きながら家で過ごす家族の何気ない時間。私がここで暮らしてよかったと思う瞬間です。

家族3人で安曇野に暮らし5年が経ちます。娘は生まれてすぐ、てんかんを発症し重い発作が続いていました。その後、詳しい検査で脳に腫瘍が



昨年娘がこども園に入園し、環境に変化がありました。入園式では静かに座っていられるか心配しましたが、きちんと座っている姿を見て、娘の成長を感じました。自然との触れ合いや同年代の友達と過ごす時間が増えたことで、刺激を受けてたくましく育ってくれています。

暮らしで感じる安曇野の恵み

安曇野で暮らしていると、自然の恵みを感じる場面がよくあります。雄大な北アルプスはもちろんですが、月や星が広がる夜空も同じくらいきれいで

すてきなんです。夜遅くふと空を見上げると、その美しさに心が安らぎます。娘も豊かな自然に囲まれて育つ中で、好き嫌いなく野菜も食べられるようになりました。庭で育てたキュウリを置いておいたら、知らないうちに丸ごと1本食べ切っていたことも。安曇野の恵みを全身で感じながら成長しています。

今は娘が周りの力を借りながら、自分の人生を歩めるように支えていくことが家族の目標です。広がる田んぼや輝く夜空のある風景は、いつまでも変わらずに私たちを見守り続けてほしいと願っています。あと、少し落ち着いたら夫婦でおいしいコーヒーを飲みに行きたいというひそかな夢をかなえたいですね。

■プロフィール

夫・広樹さんとの結婚を機に安曇野へ移住。令和2年に柳ちゃんが生まれ、市内で看護師として働きながら子育てと仕事に全力で取り組む。

山崎 美苗さん（46・豊科田沢） 自然の恵みを感じながら重ねる 家族の歩み

地域に根付く 優しい味と思いやり

望月 亮子さん（86・明科七貴）
宮川 智江古さん（85・明科東川手）



宮川さん(左)・望月さん(右)



■プロフィール

望月亮子さん 昨年まで「えべや」みそ加工部門の部長を務めたみそ作り名人。現在は指導役として、伝統の味を伝え続けている。
宮川智江古さん 副組合長を務めてきた「えべや」を昨年引退。引退後も「えべや」を定期的に訪れ、活動を応援し見守っている。

地元産の材料を使った伝統食や弁当、みそなどを製造・販売するあかしな農産物加工交流ひろば「えべや」を支える2人に長年暮らす地域への思いを聞きました。

守りたい 安曇野ならではの味

出会って50年以上の付き合いとなる2人。安曇野ならではの食文化を家庭や地域で受け継ぎ、「えべや」から次の世代へ技術や思いを伝えていきます。「この地で取れたものを新鮮なうちに加工することで出せる味がある」と宮川さんは話します。特に思い入れがあるのは毎年11月から始まるみそ作り。味の決め手となる良質な米こうじを作るため、望月さんは自分の手の感覚で米の炊き加減を見極めます。その米こうじと柔らかく煮てつぶした大豆、塩を混ぜて10カ月熟成させたら、おいしいと評判のみそが完成。「みそに欠かせない大豆と米は安曇野産」と望月さんはこだわりを語ります。

今でこそ買うことが当たり前になったみそ。以前は各家庭や近所が集まって作っていました。「当時は五右衛門風呂のような大きい鍋で大豆を煮てね。レシピもないから、地域の人から教わったことを書き出して作り方を覚えて」と望月さん。宮川さんは「近所の人たちとみそをすることで、自然と

技術が伝わっていった。時代が変わっても貴重な技術は受け継がれてほしい」と希望を話します。

互いの顔が見える心地よさ

「えべや」で週に一度行われるコンニャクと豆腐作りの日には2人の姿があります。「みんなに会えるのが楽しみ」と手際良く丁寧に作業する望月さん。様子を見に訪れた宮川さんは「作り終えたみんなとお茶を飲む時間が何より幸せ。いきいき暮らすための張り合いになっている」と笑います。

長年暮らす地域にも人と人との温かさが溶け込んでいると感じています。畑で収穫した野菜や手作りのおかずを近所にお裾分けして声を掛け合ったり、顔を合わせると時間を忘れて話したり。互いの顔を見て言葉を交わす心地よい関係はこれからも続いてほしい大切なつながりです。

時代の移り変わりを見つめてきた2人は「時の流れで変わっていくものもあるけれど、地域の温かさは変わらない。身近にある何気ないものが見直されて価値が出てくることもあるから不思議ね」と、安曇野にこれからどんな価値や魅力が生まれてくるのか期待を話しながら顔を見合わせ笑います。

大切にしている職人魂

2人が安曇野工場で作作しているのは主にエレキギターとオルゴール。「安曇野は比較的低湿度が低く、特に夏はカラッとしているので楽器作りに適しているのかもしれないね」と浅川さん。

2人はこれまでに何百本ものエレキギターを作ってきました。携わっているのは工程の一部ですが、大切にしている信念があります。それは、その時の100%の仕事をする。手掛ける製品は多くてもお客さんが手にするのはその中の一つ。絶対に手は抜かないと力を込めて語る姿からは職人としての誇りを感じます。

そして、エレキギターに比べ生産量が圧倒的に少ないオルゴール制作を続けるのにも理由があります。オルゴールは部品も含め全てを一から手作りします。種類の異なる材を接着して木箱を作ったり、寸法が狂わないように調整したりと、一つのオルゴールには多くの職人の技術の結晶が込められています。その技術を継承していくため、フジゲン㈱はオルゴール作りを続けています。オルゴール作りに携わったことのある2人も「お客さんが感動してくれた時の生の声が励みになっている」と、手作りならではのやりがいを語ります。



浅川 貴弘さん（53・三郷温） 矢彦沢 学さん（48・穂高） 日々感じる何気ない幸せと職人魂



矢彦沢さん



浅川さん



■プロフィール

浅川貴弘さん 松本山雅FCのファンで息子と一緒によく応援に出掛けている。
矢彦沢学さん 妻と4歳の娘の3人暮らし。以前はバイクを趣味としていたが乗る機会が減り、最近は家庭菜園にハマっている。

穏やかと便利がすぐ近くに

普段の生活では、家族そろっての夕食や子どもとお風呂に入るといった何気ないひとときに幸せを感じている矢彦沢さん。幹線道路から一本脇に入るだけで田んぼや畑が広がり景色も良く、車通りも少なく安全なので、休日にはよく散歩をしています。また、浅川さんも「都会と違って圧迫感が少なく、時間の流れが穏やかに感じる」と暮らしの魅力を話します。

安曇野は市街地と居住地がまとまっていて、国営公園をはじめ子どもと遊ぶフィールドもたくさんあります。スーパーや家電量販店、衣料品店など何でも近くにあり。市外に出なくても用が足りるので「ここ数年市内から出ていない」と矢彦沢さんは笑います。

日々挑戦 安曇野から届ける、 こだわりの野菜

小松 康則さん（42・堀金三田）



生まれ育った安曇野で仕事と趣味を全力で楽しんでいる小松さんに安曇野と農業の魅力と今後の夢を聞きました。

感覚に深く響く自然と共に

安曇野はすぐ近くにキャンプ場などの自然を楽しめる場所があり、日々の暮らしの中で、ふとした瞬間に心を落ち着かせてくれる風景に出会える大好きな場所です。マラソンが趣味で各地の大会に出場していますが、常念岳をはじめとする北アルプスの山並みや、田んぼの香り、小麦が風にそよぐ音など、安曇野には五感だけでなく、感覚のもっと深いところに訴えかけてくる他にはない魅力があると感じています。

農業を始めたのは、学生時代の知人から「一緒に働かないか」と声をかけられたことがきっかけです。実際にやってみると、作物はきちんと手をかければ応えてくれますし、管理の仕方にも自由度があって、自分のように「人と違う道を歩みたい」と思う性格にはぴったりでした。普段は朝5時に起きて、自分の畑を1時間ほど見てから会

社へ出勤します。会社では米・麦・大豆を生産しており、大型機械を使った大規模で先進的な農業に携われることが魅力です。一方で、完全無農薬での栽培など、さまざまな農法にも挑戦でき、幅広い経験が積めるのもやりがいのひとつです。

安曇野流の農業を世界へ

個人では西洋野菜を少量多品目で栽培し、県内外の料理人と直接契約することで、こだわりを共有しながら野菜づくりに取り組んでいます。

将来は海外に住み、日本のやり方で野菜や米を育てながら、現地の人に日本や安曇野の食文化や野菜のおいしい食べ方を伝えるのが夢です。言葉の通じない環境でも、自分の力を試したいと思っています。その夢に向けて安曇野で技術を磨き、人とのつながりを大切にしながら、これからも歩んでいきたいです。

プロフィール

妻と中学1年、小学5年生の娘の4人暮らし。株式会社宮澤ファームで働きながら、自身も農家として水稲、西洋野菜などの栽培・出荷を行う。趣味はマラソンやキャンプで安曇野ハーフマラソンには毎年参加している。

大好きな安曇野で自然や暮らしの魅力
を伝え、つながりを作り続けている島
さんに活動への思いや今後の希望を聞
きました。

広がり続ける 良さを伝える活動

生まれ育った水や空気がきれいな安曇野とそこに暮らす家族や友人への感謝——。この場所の良さを伝え、つながりをつくりたいと思い2017年にUターン。幼なじみと一緒に「安曇野の良さを伝え隊」の活動を始めました。

Instagramのアカウントを開設し、安曇野の景色や飲食店などの情報の発信からスタート。同時にリアルでも安曇野の良さに気づいてもらうきっかけを作ろうとクラフト作家やお菓子屋さんなどが集まるマルシェイベント「And Place」を初開催しました。かじかの里公園で開いた1回目から年に1回のペースで場所を移しながら続けています。5回目の開催となった2023年には100店舗を超える出店が集まり、最大規模となりました。

「And Place」のコンパクト版の「Little And Place」や観光協会と共催の「あづみ野てらす」など出店者と来場者がつながれる場になるように安曇野でさまざまなイベントを企画しています。

ハッピーな安曇野を目指して

活動をしながらずっと考えていた「もっとみんながつながる拠点を作りたい」という思いから、KIYA cafe & hostelを2019年4月にオープンしました。移住を悩んでいる人がここに訪れたことで住むきっかけになったり、引越したばかりの人に知り合いを紹介したりと常にKIYAがここにあるからこそできているつながりも生まれうれしく思います。今まではこのKIYAを軌道に乗せることに必死でしたが、最近はずつ理想に向かって動き始めています。20年後も安曇野がハッピーな場所であるために今できることをする。それが私と会社のビジョンです。

安曇野には、穏やかながらも地域を良くしたいと熱意を持っている人がたくさんいます。そんな地域の皆さんと関われることはとても心強く思います。今後企画しているイベントを通して、皆さんと共にまだ知らないこの大好きな安曇野の魅力を探しながら、思い描く20年後のビジョンに向かって歩き続けていきます。

プロフィール

株式会社安曇野の良さを伝えたい代表。高校卒業後上京し、ファッション関連業界で働いたのち、26歳で安曇野にUターン。イベントの運営や店舗の経営を通じて安曇野の魅力を発信し続けている。

島 友理奈さん（37・穂高柏原） 安曇野の魅力を伝え、 つながりを作り続ける



移住のきっかけ

山下 初めて安曇野に来たのは小学校6年生の時。その時泊まった宿の展望大浴場から見た北アルプスの美しさに、「子どもながらに衝撃を受けました。ずっと安曇野が忘れられず、社会人になつてからは友人と、結婚後は夫と4人の子どもたちと安曇野やその周辺を何度も訪れていました。」

「移住もありだね」となんとなく安曇野への移住を考え始めていた時、建築家の夫に穂高に住んでいる人から仕事の依頼がありました。これも何かの縁だと感じ土地探しを始めました。話すと長いのですが不動産屋さん、現場監督さんなどたくさんの方のおかげで安曇野暮らしをかなえることができました。

三條 私は元々東京で建築関係の仕事に就いていたんですが、体調を崩してしまい、転職を考えていました。そんな時に知人から「安曇野市に持っている家を売ろうかと思ってるんだけど使わないか」と聞かれ「使いたい！」と即答しました。以前から安曇野には何度が訪れていて、景色や自然が気に入っていたことに加え、空き家の活用や民宿経営にも関心があったので、移住を決断しました。今は森の中で仕事していて、少しの休憩時間でもリフレッシュでき、心の豊かさを感じています。

神谷 景色に感動するって、実はあまりないことですね。

山下 そう。感動するんですよ。刻々と変わる山々の景色や四季折々の風景、洗濯物を干していても感動する瞬間がよくあります。

飯島 犬を飼っていて朝晩散歩するんですけど、散歩をしないと見られない景色があるんです。雲海が見えた時には、「これは本当に現実なの」という気持ちになるほど感動します。リンゴの成長を見ていくのも楽しいですし、冬に葉を落としたリンゴの木がピシッと並んでいる様子も美しいです。緑に囲まれた環境の中で暮らせていることに、日々ありがたさを感じています。

飯島 私は長年、飲食業界で働いてきましたが、長野の食材の魅力に引かれ、いつか移住したいと考えていました。仕事の縁で、まずは東京に近い軽井沢へ移住し、レストランで働きながら、「人生あと20年」と考えたとき、夢だった自分の工房を早く作ろうと決意しました。

その年の夏に安曇野を訪れ、光橋から見た快晴の景色に「何これ!？」と思うほど感動しました。その後、市の空き家マッチング制度で条件の合う物件を見つけ、すぐに移住を決めました。

池内 安曇野ガラス工房へ就職したことが移住のきっかけでした。ガラス工房が安曇野にあることは以前から知っていましたが、初めて大学の研修旅へ



移住者座談会 私たちの新しいふるさと安曇野

移住先として多くの人に選ばれている安曇野。この安曇野に移り住んだ皆さんに日々の暮らしや仕事で感じている安曇野の魅力や地域の力を語ってもらいました。

「行で訪れたときに「なんてきれいな場所なんだろう」と感じました。工房の前を流れる川にはきれいなトンボが飛んでいて、昆虫好きの私には、とても魅力的な景色でした。その印象が強く残っていて、卒業と同時に「ここへ行くしかない」と決意し、現在に至ります。また、今の住まいと工房を市の空き家バンクで見つけることができたことも大きかったです。

神谷 大学ではデザイン系を専攻していたこともあり、北アルプス国際芸術祭をきっかけに、初めて観光で安曇野を訪れました。ここはありのままですごくいい環境だなと思いました。移住前は愛知県に住んでいて、奥三河にある豊根村の「花祭」という鬼の姿をした神や人が同じ舞台で共に踊るお祭りが好きで、何度も訪れていました。そのお祭りに漂う神も人間も自然もすべてが「対等」であるという考え方がとても好きでした。安曇野に訪れた時、まさにその「対等」が日常の暮らしの中に息づいていると感じ、「ここに住みたい」と思いました。

感じた「安曇野の魅力」、地域とのつながり。

山下 やっぱり一番は景色とおいしい水と農産物。それと聞き上手話し上手な安曇野の皆さんだと思います。

「ださり、教えるのが大変でしたがとても楽しくて、参加者から「久しぶりにこんなに笑った」と言ってもらえました。移住して3年くらいなんですけど、こういう場を提供していただけたのはありがたかったです。このイベントのあと、散歩中に「あの時は楽しかったよ」と声をかけていただくことが増え、地域に受け入れてもらえている実感があがり、すごくうれしいです。

山下 そういう経験があると地元の一員になれたかなと実感できてうれしいですね。

神谷 引っ越してきたばかりのときは、周りの人に受け入れてもらえるのが不安になりますよね。

三條 私も民宿の経営を通じて知り合った地元の人々がすごく親切にしてくれて「これも食べるでしょ」と言ってお食料を持ってきてくれたり、話も聞いてもらえてとてもありがたいです。また、現在行っているガイドの仕事は移住者が経営しているので移住者同士で助け合えるつながりがあることも実感しています。

池内 私の住む地域では、農業のやり方を教えてくれる人や、作物を分けてくれる人など、すごく温かい人が多いです。なので、私も地域の歴史や、こ



飯島 面倒見がいい人が多いですね。今年の1月に地元の婦人会料理教室で講師を務め、そば粉のクレープを作りました。30人くらい参加してくゝ



池内 康祐さん
(豊科高家・埼玉県出身)
2011年移住。ガラス造形作家・大学講師。自宅の作業場で制作活動を行いながら、子育てを楽しんでいる。



山下 美鈴さん
(穂高柏原・和歌山県出身)
2011年移住。合同会社ベースキャンプ安曇野代表。ライフワークとして移住相談を行っている。

れまで地域の人を守り続けてきたことを大切にしたいと強く思っています。例えば地区の役員や行事にも積極的に関わるようにしています。特に子どもが生まれてからは地域の行事にも自然と参加しやすくなったように感じます。

山下 私もこれまで地域の役員をいろいろと経験してきました。会合や行事に参加すると関西弁で話すことから「どこから来たの？」という話題になり、そこから会話が盛り上がる人が多いです。

安曇野の未来、今後やりたいこと

三條 自然の遊び方を知らなければ、ただの森や風景にしか見えないこともあります。地元の人にはいつも通りの風景でも、例えば釣り竿を1本持つて糸を垂らせば魚が釣れる、川に入っただけで安全に遊べる方法がある——。そういうことを知らない人は、まだまだいると思います。私が行っているガイドの仕事は、そうした自然の魅力を伝えることが目的です。

自分自身が楽しんでいると、その魅力はより多くの人に伝わると感じています。そのためにももっとガイドの人がいてもいいと思っています。教える側と聞くと難しく思うかもしれませんが、どんなわずかなことでも人に伝えられる人はもうガイドになっ

ています。池内さんが言っていた作物の作り方を教えてくれるとかも大事なことで、やってみたいけど誰に聞いたらいいかわからない人はいると思うんです。そういう人が地元のガイドになっ



たら安曇野の魅力を伝える人がたくさん増えていいんじゃないかと思っています。今後はそのような仕事もしていきたいと思っています。

池内 実は安曇野には変わらないでほしいなという思いがあります。地域の行事や伝統を、自分自身も大切にしたいと思っていますからです。安曇野に住んで10年以上になりますが、今でも「住まわせてもらっている」という感覚があります。だからこそ地元の人が大切にしてきたものを、これからも一緒に守っていきたいと思っています。↙

かったと思えるような街でいてほしいと思います。

地元の人や移住を検討している人へ

神谷 移住したい人へ何かのヒントになればいいなと思って普段からSNSで発信しています。また、地元の人も私の投稿を見て改めてこの街を好きになるきっかけになってくれたらうれしいです。

池内 周りの人に本当によくしてもらっているので、感謝の気持ちが一番大きいです。

私も新しく安曇野へ移住する人達に私が周りの人にしてもらったことを恩返しできたらと思っています。

飯島 全力で安曇野の素材を使って商品を作りたいです。これから移住する皆さんにはなにか「新しい視点」を持つてきてほしいと思います。ないものばかりに目が向いてしまうとあれもない、これもないとなってしまうがちですが、目先を変えて地元にあるもの、いいものを探すとか、都会にあるものがない生活を楽しめるという視点を

持つて移住してほしいです。
三條 安曇野の魅力に気づいてないけどちょっと気になる人はたくさんいると思うんです。「まずうちの民泊に泊まりにきてよ」とおすすめしたい。↘



神谷 朱莉さん
(豊科・愛知県出身)
2025 年移住。合同会社 ふうろう経営デザイン室を夫婦で経営。SNS で安曇野暮らしを「安曇野 1 年生のあかりん」として全国へ発信している。

三條 桜芽さん
(穂高有明・東京都出身)
2024 年移住。株式会社 Pack Vacation 代表。民宿を営みながら自然体験ガイドも行っている。



飯島 三香さん
(三郷小倉・神奈川県出身)
2022 年移住。Studio sambo (洋菓子工房) を経営。マルシェや卸、直売所で洋菓子を販売。



神谷 安曇野は山と田んぼ、そして水が本当に美しい場所です。こういう土地は探してもなかなか見つからないと思います。ですが、県外の友達に「安曇野でおすすめの観光地はどこ」って聞かれると、「安曇野の良さを感じてもらえる場所ってどこを紹介しようか」と考え込んでしまうことがあります。でも、それくらい自然や雰囲気そのものが魅力なんだと思っています。人口が減りゆく今の社会で何もしなければ地域は少しずつ衰退してしまいます。大好きなこの場所の自然や文化、暮らしを守るためにも安曇野の魅力を生か



がら良い方向へ発展させていくことも大切だと思います。私もその一員として魅力を守り、伝えていけるようなお店を近い将来開きたいと考えています。

です。泊まってもらえたら自然体験も含め安曇野の魅力を存分に感じてもらえると思います。多くの人に安曇野の良さをもっと知ってもらいたいですね。

山下 私も池内さんと同じで地域の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。移住して14年がたち、少しは地域の人になれてきたかなと思っていますので、今度は「恩送り」という形でその感謝をお返ししていきたいと思っています。私は移住相談を行っているので、地元の人に教えてもらった地域や天候のことと一緒に自分の経験も相談者にしっかりと伝えて安曇野をたくさん知ってもらい、もっと好きになって、移住してもらえ。そういう活動を続けていきたいと思っています。





8月14日 安曇野花火

これからも受け継がれる思い「安曇野は、ひとつ」

安曇野の夏の風物詩「第18回安曇野花火」が本年も盆の夜空を彩りました。

合併後間もない頃、5町村の垣根を取り払い安曇野市を一つにするきっかけとして、「安曇野は、ひとつ」をテーマに開催された安曇野花火。合併前は多くの地域で花火大会が行われていたこともあり、「それぞれの地域で行っていたイベントなら協力し合えるのでは」と企画されたのが始まりでした。

初代実行委員長の会田さんは、「毎日のように打ち上げ場所へ行き、住民の皆さんに協力を依頼した。がむしろに奮闘した」と当時を振り返ります。フィナーレを迎えた帰りに、感動の涙を流す人や握手をしてくれるお客さんの姿が、会田さんと実行委員の原動力となり、18回の歴史につながっています。現在は宮下さんが実行委員長を務め、「安曇野花火に込められた多くの皆さんの気持ちとプレッシャーを背負って毎年準備しています」と語ります。

そして今年、安曇野市制施行20周年の節目を迎えた本大会のテーマは第1回と同じ「安曇野は、ひとつ」。同大会のために花火を作り続けている有限会社伊那火工堀内煙火店の村上淳さんは「毎年大会コンセプトに沿うように、非日常のひとときを楽しんでもらえるよう丁寧な作り上げています」と話し、一つ一つ心を込めて4000発の花火

を作る様子を説明してくれました。飯島町の中田切川のほとりにある堀内煙火店の工場。ここから安曇野の夏を彩る花火が多くの職人の手によって生み出されています。

地域の絆とそれを支える人々の誇り、そして、花火師の思いを乗せたアニバーサリースターマインが打ち上げられた第18回安曇野花火。「地域に足を運ぶこと」を大切に続けられ、今では地域のバックアップ体制とともに歴史を未来につないでいきます。



打ち上げの合図をする村上さん



会田恵司さん(右) 地元恵司さんと企業の皆さんの協力とお客さんの喜んでいく姿があったから今があります。 宮下雅士さん(左) 第1回からの積み重ねとバックアップ体制があって、安心して開催できます。



へこれハ昔々の物語じや
この平野で皆が
平和に暮らせるのも
犀龍小太郎の
御陰なのじや
そろそろわしハ
長峰山に戻ろう

8月23日 信州安曇野薪能

創作能・犀龍小太郎 安曇野の夜に舞う

13年ぶりにスペクタクル能を上演 かがり火と共に未来を照らす。

——松本盆地はかつて大きな湖でした。人間の子として育てられた犀龍と白龍王の子・小太郎。成長した小太郎は、母・犀龍と再会し背に乗り山を突き破り湖の水を日本海へ流し、人々が暮らせる平野を拓きました——。

夏の夜、揺れるかがり火に照らされながら、信州安曇野薪能で「犀龍小太郎」が平成24年以来13年ぶりに上演されました。この作品は能楽師で名誉市民の故青木祥二郎さんの長男・青木道喜さんが平成12年に薪能10周年の記念として創作したオリジナル。初上演から17年の時を超えて、市制施行20周年の節目に郷土の民話を原作にした作品が披露されました。

今回、主役の犀龍小太郎を務めたのは青木道喜さんの長男・真由人さん。「今までは、父や先輩方が演じる能を支える立場でしたが、今回この作品で初めて役を演じました。父が作ったこ



開演前にほほ笑む 青木道喜さん(左)と真由人さん(右)

信州安曇野薪能は、市民ボランティアの皆さんの手によって運営されています。当日は、会場設営や駐車場案内、受付などに汗を流す地域の皆さんの姿が見られました。

20周年の節目に「文化の継承と地域を支える力」が融合した舞台で夜空に舞う小太郎の姿が安曇野の未来を静かに照らしました。



市制施行20周年記念事業リポート
安曇野の未来に向かってチャレンジ



七日市場の歴史を学ぶ会と同地区公民館が制作した同区の歴史や文化、自然を伝える「七日市場かるた」500セットが市制施行20周年に合わせて完成し、区内全戸に配られました。かるたが気軽に地域を知る機会になることを願い、令和5年から本格的に制作を開始。句を作るため地域学習の勉強会を開き、回覧板でも募集したところ、祭りやケヤキの木などを題材にした130句が32人から寄せられました。同会と公民館の関係者がその中から44句を選定。取り札には句にちなんだ写真、裏面には紹介文を載せるなど工夫しました。同会前会長の曽根原孝和さん(89)は「思いの詰まった作品ばかりで選定には苦労した。地域の皆さんと作り上げたかるたが、歴史や環境を知るきっかけになればうれしい」と話し、同区公民館長の望月武志さん(60)も「11月には完成を祝うかるた大会を予定している。将来にわたって受け継がれてほしい」と笑顔を見せました。

地域の魅力 かるたに込めて受け継ぐ

区民が地域の魅力をよみつくる七日市場かるた



市制施行20周年と戦後80周年を記念する安曇野平和コンサート(実行委員会主催)が豊科公民館で開かれました。シンガーソングライターの加藤登紀子さんがホールを埋めた約700人に平和への祈りを込めた歌を届けました。曲の合間に加藤さんは自身の生い立ちに触れ、「日本は戦争が終わった時に二度と戦争をしない憲法を持つ国となり、平和のバトンを80年守ってこられた。これからも美しい星を守らなければならぬ」と語り、全20曲を熱唱しました。

加藤さんのファンだという財津喜代子さん(81)は「加藤さんの歌は共感できることが多い。ウクライナなど世界で平和がおびやかされるようなことが多くて心配。母が話してくれた戦争の話の思い出し、平和が一番だと改めて感じた」と語りました。

また、会場ロビーにはウクライナの子ども達が描いた原画パネルも展示され、来場者は真剣な表情で見入り、平和の尊さをかみしめていました。

戦争を知らない世代へ 80年つなぐ平和のバトン

5月18日 平和コンサート 加藤登紀子 for peace 80億の祈り



田淵行男の業績を後世に残し、山岳・自然写真の新人発掘を行う写真賞の表彰式と記念講演会が穂高交流学習センター「みらい」で開かれました。9年ぶりの開催となった今回は、全国から70人・97作品の応募がありました。

豪雪地帯の自然とそこに暮らす人を撮影したモノクロ写真が評価され田淵行男賞を受賞した中野陽介さん(38・福島県只見町)は表彰式で「受賞は大きな励みとなった。支えてくれた家族に感謝したい」と話し、受賞を喜びました。また、今回は新たな試みとしてジュニアの部を創設。野鳥が昆虫を食べる瞬間をとらえた作品でジュニアの部・安曇野市長賞を受賞した矢花沙織さん(15・明科七貴)は「受賞は信じられない気持ち。今後は風景写真にも挑戦したい」と意欲を高めていました。

その後の記念講演では、選考委員長の飯沢耕太郎さんが山岳写真から見える田淵が実践した自然との向き合い方を解説。参加者は生誕120年となる田淵の情熱に思いを巡らせ、講演に聞き入っていました。

偉大なナチュラリストを追って 生まれる新たな可能性

8月10日 第7回田淵行男賞写真作品公募 表彰式



研成義塾ゆかりのオルガンと歌のコンサート(井口喜源治記念館主催)が穂高交流学習センター「みらい」で開かれ、訪れた約170人が柔らかな音色に聞き入りました。ステージに登場したのは、井口喜源治の活動を夫・愛蔵と共に支援した相馬黒光が嫁入り道具として持参し、その後研成義塾に寄贈された足踏み式オルガン。製造から130年以上が経ち音が出ない状態でしたが、数年前に修復され音色が復活しました。

コンサートでは、オルガン奏者の杉本周介さん、ソプラノ歌手の原諠子さん、安曇野混声合唱団が「仰げば尊し」「早春賦」などを披露。観客と市歌を歌う場面もあり、会場は一体感に包まれました。訪れた中村寛治さん(78・池田町)は「小学校で弾いたオルガンの音が懐かしい。優しい音色と透き通った歌声に感動した」。合唱団長の野本貞子さん(77・穂高有明)は「音色が素晴らしく、共に歌えたことに感謝。来年は合唱団も創立20年。これからも安曇野で歌声を響かせたい」と話してくれました。

黒光が愛したオルガン 時代を超えて響く音色

6月14日 安曇野に息づく音楽の調べコンサート



全国で夢をかなえる 安曇野人

INTERVIEW

子どもの頃に安曇野で感じたアナログな感性
作品と人のつながりを作る

太田 貴寛さん(36・穂高出身)

田植えや稲刈りなど、月に1回安曇野に帰省した際の自然の中での生活や親戚の集まり……。その体験が今のアイデアにも生かされています。子どもの頃から何かを作るのが好きで、映画監督を目指して大学へ進学。卒業制作では、子どもの頃に過ごした安曇野を舞台に作品を作りました。当時、母の実家に集まる親戚や近所の人が減ってきていたため、思い出の家を残したいという思いを込めました。その後、手に職をつけたいとVFXの道へ。

現在は会社の代表を務め、創業5年目。社員約90人と共にCMや映画、配信動画などを年間約300本企画・制作しています。多くのアイデアを試しながら一つのものを作り上げることにやりがいを感じています。完成した作品が次につながることも。



株式会社KASSEN CEO・VFXスーパーバイザー。BUMP OF CHICKEN「なないう」MV、映画「約束のネバーランド」に携わる。来年公開のオリジナルアニメーション作品の制作にまい進中。

最近、SNSで作品を発表している人と一緒に制作する機会も増えてきました。将来は、東京のスタジオや全国の制作者をつなぎ、地方でも働きやすくワクワクできる事務所を作るのが夢です。それが安曇野で出来たらうれしいですね。川のせせらぎや季節の移ろい。デジタルな仕事だからこそ、子どもの頃に安曇野で培ったアナログな感性やつながりを大切に、これからも作品づくりに向き合っていきます。

※ VFX: Visual Effectsの略。主にCGを用いて現実には存在しないものを映像に合成したり、既存の映像を加工したりする技術。



全国で夢をかなえる 安曇野人

INTERVIEW

らしさを磨き目指すはM-1優勝
いつか安曇野で生の笑いを届けたい

村田 優斗さん(32・豊科高家出身)



地元の友達には芸人をやっていることを言っていないんです。小学生の頃は野球に夢中でした。中学で一度やめた野球を高校で再開しようか迷っていた時、テレビで見た「めっちゃイケ」が芸人を志すきっかけに。当時からクラスでは、いじられたり面白いことを言う存在で「いつかテレビで会いましょう」と冗談を言っていました。

東京の大学に進学し、お笑いサークルを見学。現在も活躍する芸人仲間の面白さに圧倒され、「大学生でこんなに面白い人がいるのか」と自信をなくし、卒業後は不動産会社に就職。それでも芸人の夢をあきら



芸歴8年。東京ZOOの23期。自分がないものが全部ある和泉さんと世界クジラを結成し4年目。同期は令和ロマン。安曇野での思い出は中学時代に男女で行ったあづみ野祭り。

めきれず、NSC吉本総合芸術学院へ。和泉壮さんと出会い、4年前に「世界クジラ」を結成しました。現在は月20回ほどのライブや動画配信に向け、ネタ作りに明け暮れる日々。2人の世界観を一致させ、コンビとして笑ってもらえるネタを作る作業は思った以上に大変ですが、最近「自分たちらしさ」を見つけることがテーマ。それがM-1優勝にもつながると信じています。いつか安曇野で県内出身の芸人とイベントを開き、エンタメを地元から発信したいと思っています。そしてそこで、友達や家族に芸人の自分を見てもらい喜んでもらうことが今の夢です。



全国で夢をかなえる 安曇野人

INTERVIEW

自ら考え・行動する
安曇野が掲げる教育理念で目指す全国聖覇

曾山 加奈子さん(38・三郷明盛出身)



兄の試合の応援に行った際、急ぎよ出場して点も取らせてもらえたことが、サッカーを始めたきっかけです。小中学校ではスポーツ少年団やクラブチームで競技を続けてきました。長野トレセンで一緒だった先輩が聖和学園高校に進学したことを知り、サッカー中心の生活ができる環境に魅力を感じ、両親を説得して進学。そこでゴールキーパーに転向し、フィールドプレイヤーとの連携を深めるため、意思疎通を必死に考え努

元サッカー女子日本代表GK。聖和学園高等学校(仙台市)・秋田大学へと進学し、2010年に日テレ・ベレーザに加入。2016年に引退後、聖和学園高等学校女子サッカー部の監督を務めている。



力しました。自分の指示で複数のディフェンダーを動かし、シュートコースを限定しセーブする。その時々々の状況に応じて、選手の特性など多くの情報を瞬時に判断し伝える力が身についたのは大きな財産です。現在は監督として母校の指導に携わっています。大切にしているのは、サッカーに限らず、それぞれのステータジで活躍できる人を育てること。自分で考え、行動できる力を養ってほしいと思っています。中学時代に親身に接し、きつてもやり切る姿勢を教えてくれた指導者たちの姿を今の自分に重ねながら、全国制覇を目指すチーム作りに励んでいます。



全国で夢をかなえる 安曇野人

INTERVIEW

ふるさとへの愛をキャラクターに込めて
安曇野を知るきっかけを作り続ける

徳竹 舞さん(28・豊科出身)



ります。まだ来たことのない皆さんが「つにてんてん」のキャラクターや楽曲をきっかけに安曇野を知り、いろいろな入り口から安曇野を訪れるきっかけを作りたいと思っています。この活動を通して安曇野に訪れる観光客や移住者が増え、市から全国へ彼女たちと安曇野の名が共に広がるように今後も活動を続けます。



東京で元プロデューサーとしてキャラクター関係の仕事に携わり、本年9月にUターン。故郷のために何かしたいと思い「つにてんてん」プロジェクトを始動

私たちの暮らしが
安曇野を作り続ける
そして20年先へ

私たちの今の暮らしがつづる
物語。それを磨き続けること
がきっと未来の安曇野につな
がっていきます。安曇野市は
皆さんと一緒にこれからも
ずっと物語を作り続けます。

① 誰もが輝ける 共生社会へ



外国籍市民の活動を広める あづみの国際 DAY！

「世界にやさしい安曇野へ」をスローガンにステージ発表やブース展示などで、
いろいろな国や地域の文化・習慣等を知れるイベント。本年は10月に共生社
会×文化芸術フェスタとして開催。

市では、令和5年3月に「多様性を尊重し合う共生社会づくり計画」を策定し、年齢や性別、国籍障がいの有無にかかわらず、すべての人がお互いを認め合い、活躍できる安曇野市を目指して取り組みを進めています。

して生活できるよう、合理的配慮の推進やユニバーサルデザイン化にも取り組んでいます。
さらに、女性が家庭と仕事を両立しながら安心して働けるよう、子育て支援の充実や職場環境の整備、リモートワーク支援などを進めています。

外国籍市民に向けては、英語・中国語・ポルトガル語が話せる職員が生活相談に応じる外国籍市民相談窓口を設置しているほか、タブレットを使って20の言語に対応できる「見える通訳」を導入しています。
また、誰もが働きやすく、安心

近くに暮らす人の姿に目を向けるときとその人の輝いているところがみつかるはずです。多様な人が互いに理解し、支え合いながら暮らせるまち。それが安曇野市の目指す未来です。



外国籍市民相談窓口の充実

市役所1階に英語・中国語・ポルトガル語で相談できる窓口を令和5年7月から設置しています。母国とは文化や習慣が違う安曇野で外国籍市民の皆さんが安心して生活できるように、暮らしの困りごとや手続きを相談できます。



インクルーシブ遊具を公園に設置

年齢や能力、障がいの有無などに関わらず、誰もが一緒に楽しめるように設計された遊具を豊科南部総合公園、防災広場、かじかの里公園に設置しています。



リモートワークで多様な働き方を推進

育児や介護と仕事を両立したい人などライフスタイルに合った働き方の支援と企業への業務切り出し支援などを行っています。多様な働き方を推進し自分の得意分野を生かした働き方で持続可能な安曇野市を目指しています。



インタビュー
竹内美夏さん(右)
フルシユラルスさん(左)

外国籍市民相談窓口で手続きや暮らしの相談に応じている竹内さんとラルスさんに話を聞きました。

さまざまな国籍の人と毎日のように接しているうちに、少し工夫すると日本語でも意思の疎通ができるケースに多く出会いました。大きな声でゆっくり話したり、専門的な言葉をやさしい日本語に言い換えたりするだけで、伝わりやすさは格段に上がります。

皆さんの周りにも外国籍市民の皆さんが暮らしているのかを知り、話す機会があれば言葉を交わしてみると新しい発見があるかもしれません。何か特別なことはなくても話ができる人が近くにいと心強いですし、それが地域の居心地の良さにもつながっていくと思います。

地域で誰もが気軽に声を掛け合える環境を築き、それぞれの違いや大切なことを尊重し合える輪が広がっていく未来を皆さんと一緒に作っていったらうれしいです。



世界を知ろう「オランダ編」で母国を語るラルスさん

安曇野市は、国連が掲げたSDGs達成に向けて地域の特色や強みを生かし、積極的に取り組む自治体として昨年、国から「SDGs未来都市」に選定されました。同時に、里山再生計画「さとぶろ。」を中心とした「里山からつながる安曇野共生プロジェクト」がモデル事業としてダブル選定されました。市では、2024年～2026年までの取り組みとして、SDGs未来都市計画を策定し、豊かな自然や継承されてきた地域文化を安曇野ならではの産業に生かすことを目指しています。そ

して、誰一人取り残さない「共生」という視点を持ち、持続可能で誰もが幸せにずっと暮らし続けられるまちづくりのために取り組みを行っています。私たちの今の暮らしを守り、未来へつなげていくために、この20周年の節目をスタートとしてさらに20年先そしてその先も幸せで暮らして行けるよう皆さんと共に歩み続けます。



里山からつながる安曇野共生プロジェクト

経済、社会、環境の3側面の好循環を生むモデル事業の中核を担う、里山再生活動「さとぶろ。」。4つのプロジェクトのもと里山で楽しむイベントの企画・運営など、里山との関りを深める活動をしています。安曇野の里山に多くの人が集い、楽しみ学ぶ、保全するなどの体験から安曇野の里山に携わるきっかけづくりや体制整備を進めています。

経済

東部アウトドア拠点の構築

明科地域の活性化を目的にアウトドアスポーツの拠点となる施設整備に向けて計画的に事業を進めています。同時に前川周辺でカヌーやラフティングなどのスポーツに親しむイベントなども開催。にぎわいの創出がやがて地元回帰、人口増加につながっていきます。



社会

認定こども園で自然保育体験入園

安曇野へ移住を検討している人を対象に本年6月から自然保育体験入園をスタート。安曇野ならではの自然を生かした特色のある保育に加え園周辺の住民との交流や地域の魅力を実際に感じることが出来ます。安曇野への移住を増やすと共に未来を支える子どもたちの感性を磨きます。



インタビュー

三宅雅也さん（53・穂高有明）



ニホンザル追い払い隊やさとぶろ。サポーターとして、里山の保全活動などを行っている三宅さんに思いを聞きました。

かなりの熱量で活動を重ねてきたことで、群れごとの特徴や逃走ルートをほぼ把握できています。緩急つけた追いでサルの群れの意表を突くフォーメーションを組み、点ではなく面で追うことで逃走方向を制限するなど、戦略的な追いで想定どおりにサルを移動させることができるように。とは言え、野生動物との駆け引きに裏をかかれることもあります。そんな時、近所の皆さんの情報提供や「おつかれさま」「がんばって!」などの声援がエネルギーとなっています。また、さとぶろ。では、クマ回避を目的とした緩衝帯づくりの樹木伐採に取り組んだことがありますが、山と里の境界を明確にすることは、野生動物との共存で重要なこと。このような組織的な取り組みに加え、人にとっては廃棄物でも、野生動物にとっては魅力的なエサとなります。それらを置かないなど、一人一人が小さな行動を実践する。こうした積み重ねが、安曇野の自然と暮らしを守る未来へとつながっていくと考えています。



ニホンザル追い払い隊の活動を行う三宅さん

環境

ニホンザル追い払い隊による野生鳥獣との共存

西山山麓のサルによる被害を食い止めるため「ニホンザル追い払い隊」を組織し野生鳥獣との共存を図っています。これによりずっと守るべき田園風景や山の保全につながり人と自然が共生できる安曇野を作ります。



安曇野のオオイヌノフグリのような音色が奏でられるミニハープ。

指の病気をきっかけにリハビリで始めたこの楽器と向き合っているとその音色から私の音楽の原点は安曇野なんだと改めて気付かされました。子どものころから安曇野で育ち、地元の人たちに音楽を教えてもらったから今の私があります。これからも音楽を通じて安曇野の皆さんに恩返しをしていきたいと思っています。



伊東 航太さん (16・豊科高家)
たからもの「田淵行男・著
『アシナガバチ』(サイン入り)」



降幡 好華さん (31・明科中川手)
たからもの「あづみの自然とこどもたち」



梅田 有希さん (37・三郷小倉)
たからもの「今まで過ごしてきた時間」



篠原 寛行さん (61・堀金烏川)
たからもの「サザンオールスターズのデビューアルバム」



西村 淳子さん (42・三郷明盛)
たからもの「食の大切さに気付かせてもらった炊飯土鍋」

未来に残したい

私のたからもの



渡部 日茉莉さん・翔陽くん・柚乃花さん
(12・5・8・穂高柏原)
たからもの「カブトムシ」

家族や友達。
そこから広がる輪を大切に暮らす。

家族や友達とのつながり。そこから広がる輪が私のたからものです。その中でも家族の輪が一番大切。そこから知り合いが増えて輪がもっと広がっていきます。20周年は安曇野の皆さんにとっては一つの区切り。今後も何十年も安曇野のいいところを見つけ続けて欲しいと思っています。私はここに住み始めてまだ数年。一年一年、安曇野での「輪」を大切に思いやりを持ちながら、学びつつ暮らしを楽しんでいきたいです。



どこまでも自然な子どもたちの笑顔は世界共通のたからもの。

素直で無邪気な子どもたちの笑顔に元気もらいます。その笑顔は世界共通のたからもの。自然があふれる気持ちのいいここ安曇野は、時代が変わっても大切なものは残しつつ、新しさも融合させている豊かさがあります。20年経っても子どもたちの笑顔が変わらないように、安曇野らしさを表現し続けているのは、この地を愛し大事にしてきた皆さんの力だと感じています。



尾澤 大輝さん・凜音ちゃん
(11・1・明科七貴)
たからもの「家族との思い出」



宮坂 健さん (11・堀金烏川)
たからもの「中信地区小学生陸上競技大会 1000m 第5位の賞状」



丸山 清治さん (79・穂高)
たからもの「小説『安曇野』のルーツ、白金地区」



日詰 恵里子さん (61・豊科)
たからもの「北アルプスと山小屋と登山道」



安曇野の風景・文化を大切に
つなぎ残したい。

創業者のふるさと安曇野と礫山美術館は当社としても私個人としても後世に残していきたいたからものです。特に5月に訪れた際に見た礫山美術館のツタと新緑の共演は忘れられません。安曇野には「のどか」という言葉だけでは表せられない魅力があります。本年からコロナ禍で中断していた安曇野での社員研修も再開し、皆さんとの交流の密度を高めます。これからも食と美術と文化をつなぎ、安曇野の魅力を発信していきます。

編集・発行 安曇野市 政策部 秘書広報課
〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000 番地
TEL0263-71-2000 FAX0263-71-5000
令和7年10月発行



市制施行 20 周年記念動画「RE AZUMINO」を
市公式 YouTube で公開しています。



イラスト 守屋玲子さん 東京生まれ県内在住。
「芸術新潮」堀江敏幸エッセイ挿絵、新聞連載小説・ねじめ正一「むー
さんの背中」挿絵などを手掛ける。国内、海外での展示も多数。
安曇野では2022年にbellwood coffee labにて個展「Present」を開催。

